

伝文

日本口承文芸学会 会報

【伝文】 第33号 2003年 9月

発行 日本口承文芸学会

〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1

東京学芸大学 古典文学第4研究室内

TEL/FAX 042-329-7246

口承文芸の政治学

新会長 石井正己

柳田国男は、昭和22年に『口承文芸史考』を出している。小さな本だが、これが口承文芸研究の出発点になったと思われる。私どもの学会はその中核にあるので、そうした歴史の束縛から逃れることはできないはずである。しかし、これまで、その意図が十分に読み込まれてきたとは言いがたい。むしろ、読まれぬままに、なんとなく自明なものとして「口承文芸」が前提化されているというのが現状ではなかろうか。

この本の冒頭には、「口承文芸とは何か」が置かれている。これは、昭和7年、『岩波講座日本文学』の第11回配本の『口承文芸大意』が初出であった。まず、「口承文芸」という翻訳語を「新語」として採用する経緯を述べている。この用語が翻訳語であることは、絶えず反芻すべき原点であろう。しかし、起源論に陥ってはなるまい。柳田がそれをどのように位置付けたかを認識することの方が重要である。

実は、『口承文芸大意』と同時に『文学』第11号が発刊されている。これには、『口承文芸史考』の最後に置かれた「文芸とフォークロア」が載っている。短文だが、『口承文芸大意』の意図を語る貴重な論考であった。「口承文芸」を「文筆以外の文芸」と定義するが、その前段には、「田夫野人の間に、落ちこぼれて居るもの」という言い方が見える。「口承文芸」には、こうした大前提があったことになる。

一方、『口承文芸史考』は、もう一つの柱として、「昔話と伝説と神話」を載せている。これは、昭和10年から11年にかけて『昔話研究』に連載された「昔話覚書」が初出である。『口承文芸大意』の終わりにある「昔話と神話」から発展した論考であることは、容易に想像がつく。『口承文芸史考』の「索引」は、ほとんどをこの中の話型から拾っている。だが、この論考には、「口承文芸」という用語を見つけることができない。

その後、戦後の口承文芸研究では、「昔話と伝説と神話」が重んじられてきた。その原点は、たぶん「自序」にあった。柳田は「神話の復原」を主張し、「昔話と伝説と神話」は「一つの方法」であるとしたが、「口承文芸とは何か」は「用意が足り」なかったとする。それに対して、「口承文芸とは何か」が顧みられるようになったのは、近年のことにすぎない。『口承文芸史考』の読み方は、少なからぬ偏向を帯びてきたのである。

振り返ってみれば、私などは、「口承文芸」そのもの以上に、そうした「口承文芸の政治学」に関心を持ってきたところがある。周囲には柳田以後という風潮が強い中で、むしろ柳田国男とは何かを問いつづけ、その中心に口承文芸研究があったのである。ほとんどの大学に講座や学科を持たないこの学問は脆弱だが、それゆえに、「口承文芸とは何か」という議論ができるはずだと信じてきたからである。

(東京都)

小林 幸夫

「田村三代記」の古層、と副題されたように、東北の語り物「田村三代記」を用いて、〈馬の家の物語〉の古層を明めようとされる。しかし、この課題の究明は、それほどたやすいことではない。「旭巫女縁起」のビデオを示して福田氏が語られたように、この奥浄瑠璃を語った盲僧(座頭)たちは、すでにこの世にはない。わずかにその台本が残されるのみ。その困難を氏は民俗学的方法を駆使した〈仮説発想法〉によって克服しようとされてきた。その試みは早く「信州滋野氏と巫祝唱導」に始まり、「小栗照手譚の生成」や「小栗」語りの発生―馬の家の物語をめぐる―を経て、「馬の家」物語の系譜(上)(中)―〈田村語り〉をめぐる―へとつづく。このテーマは福田氏の語り物(唱導)研究の大切な課題なのだ。今回の講演は、〈馬の家の物語〉の系譜を、奄美ユタの祭文「思い松金」に求めて、〈田村語り〉の祖型を探ろうとした、壮大な試みである。長年にわたる南島説話研究の成果が、ここに生かされているのを見ると、感動的でさえある。

折口信夫は「小栗判官論の計画」を著して、〈小栗語り〉が馬の神にかかわる巫覡の徒(盲僧・巫女)によって発想された〈馬の家の物語〉であることを示唆した。福田氏はその論を実証すべく、「田村三代記」を用いて、〈田村語り〉の祖型を求めんとされる。では〈田村語り〉の祖型とは何か。奄美ユタの成巫過程とその神降し祭文「思い松金」にそれは求められる。この日光感精説話を祖型とした物語、それが〈田村語り〉である。その論理の精度をより高めるために、中世日本の「本地物語」(ことに日光感精説話)や韓国の巫覡祭文(ポンプリ)が比較の資料として用いられる。このようにして福田氏は、巫祖神話・巫祖祭文に通ずる巫覡物語を、〈田村語り〉のうちに構想されるのである。そこに示されるのは、東北文芸のゆたかなひろがりである。

(愛知県)

内藤 浩啓

「遠野にいったら、昔話を聴こう！」

この言葉は今や、遠野来訪の合言葉であり、本大会の参加者にも昔話に触れる機会を楽しみにしていた方は多かったであろう。その意味でも、期待を酌み取った企画であったが、ただ「遠野＝語りを聴く」という構図に留まらず、翌二日目の研究発表(小林美佐子氏「聞く『昔話』の文体―『正部家ミヤ昔話集』作成時の記述作業から―」)およびシンポジウムでの基調講演(佐藤誠輔氏「語り部教室/再話から」)・討論などに連動・発展していき、学問的展開の布石としてこの語りも存在した。

語り部は、観光と結びついた形で語り始め「遠野の語り部発見」といわれた故・鈴木サツさんの姉妹・姪にあたる正部家ミヤさん(語りは「オシラさま」「豆腐とこんにゃく」)、菊池ヤヨさん(「母の目玉」)、須知ナヨさん(「せあみの話」)、菊池栄子さん(「びつき(蛙)の上方見物」)の四名で、いずれも語りの名人、故・菊池力松さんの継承者である。それぞれが、先日亡くなった四女への思いを抱えての登壇で、先人や亡き人を留めた姿に、語りは思いを支えられて立ち現われてくるものなのだ、と改めて実感した。

それぞれの昔話も、力松さんの思い出話を掘めながら語られ、この語り部たちが育まれた「語りの場」の光景が浮かんできた。

広い会場の壇上に登った語り部の皆さんと聴衆である参加者の間で交わされる聞き手の相槌が希薄で、戸惑いがなきにしもあらずであったが、最後には遠野市長を始め会場を巻き込み仕草をつけて語る「ねずみの参宮」で一層盛り上がった。全体に、ユーモアと温かさの流れる有意義な時間を過ごすことができた。ただその時間が押していたこともあり、正味時間が短い印象があったのが残念で、もっと聞きたい思いにも願われたのだが、それはまたの遠野訪問でのお楽しみにしたいと思う。

(神奈川県)

竹内 邦孔

第1会場では、次の3つの研究発表が行われた。

まず、片岡哲司氏は「河童去来伝承の社会的機能—地域社会における河童伝承の役割—」と題し、熊本県八代郡坂本村鮎婦の、ヤマワロ伝承を取り上げた。そして自身の聞き書き資料から、地区内でもヤマワロに対する認識が一樣ではないこと、その伝承がいまだに具体性を持ち、生活に影響を及ぼしていること、ヤマワロは山の神の特性をもつことを指摘した。また、隣接する八代市で展開されている河童共和国の活動を紹介し、市との合併により、伝承の役割が変化していくのではないかと見通しも提示した。

続いて、町田知基氏は「主人公が死を告白する話としての『瓜子姫』—『殺される瓜子姫』と『継子と鳥』との比較—」で、「瓜子姫（東日本型）」と「継子と鳥」の構成の共通点の中でも特に歌に注目し、「瓜子姫」の歌の全国的な分布を示して考察を加えた。そして「瓜子姫（東日本型）」が多く確認できる地域ほど、「継子と鳥」との類似点がみられるが、その理由として、殺された主人公の魂が鳥に化身して、敵役の所業を暴露することに話の中心があるからではないかと指摘した。

そして、萩野裕子氏は「日蓮伝承とその成立背景」で、富士山麓には日蓮伝説が多く分布するが、それらは史実として位置付けられていく傾向があるとし、近世中後期の甲斐の日蓮宗の情勢、関連文献から、富士山麓の日蓮伝説が近世中期以降に成立したことを指摘し、その中でも曼陀羅が介在する曼陀羅系日蓮伝説について、寺院との関係から、伝説の成立と伝播に日蓮宗宗教者が関わった可能性があると指摘した。また、伝説にまつわる事物が視覚に訴えることで伝説を補強する機能を果たしたのではないかと、家系伝承における曼陀羅の意味などこれからの展開も示した。

今回の発表には、今後の展開への質疑が多く寄せられ、一つの題材がもつ多様な可能性を相互のやり取りから知ることができた発表であった。（東京都）

長野 晃子

まず、于曉飛氏の「イマカンに見るホジェン族の嬪選び」の発表がなされた。中国少数民族ホジェン族に口承により受け継がれ、狩猟の野营地、漁業の網場で夜うたわれていた英雄叙事詩イマカンは、昔のホジェン族の風俗習慣を今に伝えているという。イマカン14編を資料とした発表は、総じてイマカンの内容紹介の域を出ていないが、英雄（モルゲン）の一夫多妻制はホジェン族の宗教：シャーマニズムの象徴ではないかとの指摘は興味深かった。妻たちはシャーマンの能力を持ち、コリ（神鷹）に変身し、英雄を成功に導く守護神となっているという。

続く立石展大氏の発表「日中の伝承の差異—小鳥前世譚を中心として—」は、先行する研究史もしっかり踏まえた好発表であった。これまでなされてきた日中の話の類似についての研究に対して、立石氏は、話の差異を探り、話の背景にある両国の文化の違いに迫ろうと試みている。日本になく中国にある話として、権力者（国王・地主・金持ちなど）の虐待を泣き声などの由来とする話に注目し、権力者との葛藤譚の存否が日中間の違いとして浮上するという。配布された精緻かつ膨大な資料プリントも資料的価値が高いものだった。欲をいえば、時間面で発表にもうひと工夫欲しかった。

最後の林晃平氏の「昔話・伝説における異郷の表現とイメージ—浦島伝説を視点として—」は、「口承文芸における異郷イメージ表現の書承とは異なる特徴は何か」を問題提起とする発表であったが、発表内容は浦島伝説の龍宮を例にとり、異郷イメージは現実世界との比較類推で近似的に構築され、欲望を満たすものが存在する空間でしかなく、龍宮門に象徴される典型的表現、絵にも描けないといったきまり文句が示すように異郷イメージは実に貧困であるとの説明にとどまっていた。当初提起された問題への再挑戦を期待したい。（東京都）

〈研究発表・第3会場〉

齋藤 純

第3会場（遠野市立図書館・視聴覚ホール）の司会
は中村とも子氏・野村典彦氏。まず、青木俊明氏の「
口承文芸における固有名詞について—『遠野物語』を
中心に—」。東京学芸大学大学院で「遠野物語辞典
人名索引・地名索引」（『時の扉』13号 発行・石井
正己）編集に携わった氏は、佐々木喜善に関する人名
を分析し、叙述の主体が柳田にあること、喜善の話が
祖父—母—孫と伝承されたこと、「拾遺」では友人・
知人・近所からの話が増えることを示す。また、地名
を分析し、物語が土淵村を中心とすること、ただし、
場所の描写は少なく、地名は修辞として用いられてい
ることを指摘した。語彙データによる明快な成果で、
固有名詞の役割のいっそうの具体化など今後の展望に
ついて会場から質問があった。

次の小林美佐子氏「聞く『昔話』の文体—『正部家
ミヤ昔話集』作成時の記述作業から—」は、昔話の文
字化から立ち上がった問題を追求し、結果として語り
の魅力を文法的に捉える試みを提示した。文章として
不適切に見える主語の不一致や不提示は、語り手・聞
き手共通の大前提として行為主である主人公が潜在化
した現象であること、会話・内話の文末が発言主と整
合しない現象は、語り手の立場の表れであることなど
興味深い指摘を行う。新しい研究として会場から評価
され、話者が調査者に示す待遇表現の問題や、聞き手
の役割の鮮明化などの課題も示された。

最後は、根岸英之氏の「伝説の主人公をモチーフに
した地域文化振興事業—千葉県市川市の『手児奈フェ
スティバル』に携わって—」。従来型の顕彰よりも、
創作の契機として伝説が活用された文化事業の実践例
が報告された。当該市の行政職員であり口承文芸研究
者でもある発表者の立場を自覚的に位置付け、伝承関
与の一形態として地域文化のコーディネイターという
役割像を提言する。いつも離れたところから伝説顕彰
の批判ばかりしている筆者などは反省。（奈良県）

口承文芸の研究と継承—遠野からの発信—

常光 徹

当日の発表者（敬称略）と発表題目は次のとおりで
ある。石井正己「柳田国男／『遠野物語』から」、小
笠原晋「佐々木喜善／博物館から」、田中浩子「女性
／昔話集から」、川森博司「観光／映像資料から」、
佐藤誠輔「語り部教室／再話から」。

はじめに石井から、本シンポジウムの構想と狙いにつ
いての話があった。「昔話」や「口承」という言葉
が意識化される状況のなかで、研究と継承という課題
を二分するのではなく、研究者が継承者にもなり得る
し、継承者が同時に研究者でもあるような関係を前提
として考えてみたいとの発言があった。遠野は、この
課題に取り組む上で常に最前線的话题を提供し続けて
きたし、今もそうだという。口承文芸という概念が生
まれる以前に誕生した『遠野物語』が孕む諸問題を分
析し、民話のふるさと遠野があらわれてくるまでの事
情や、現在抱えている問題点について指摘した。

小笠原は、遠野市立博物館が昭和61年(1986)に『佐
々木喜善全集』の第1巻を刊行してから平成15年(200
3)に第4巻を刊行するまでの経緯を、その準備段階も
含めて説明した。かつて、『遠野物語』を『土淵物語』
と呼んだことに対して喜善が憤慨したという話などを
取り上げながら、地元の人々の喜善や『遠野物語』に
対する意識・評価がどう変化してきたか、行政の動き
や研究者の活動をからませたの話は興味深かった。と
くに昭和45年(1970)の岩手国体を契機に、『遠野物語』
を中心とした観光化がすすめられ、語り部の誕生や、
国鉄のディスカバージャパンのキャンペーンによって
民俗観光が登場してきたという。今後は、〈環境〉と
いう視点を導入しながら、観光と口承文芸の共存をど
う考えていくかが重要ではないかと指摘した。

田中は、昔話集をつくるとはどういうことかにつ
いて話した。『正部家ミヤ昔話集』（古今社）は、発表
者を含む4人の女性と遠野の語り手正部家ミヤさんと
の10年にわたる付き合いのなかから生れたものである。
編集にあたっては、「ミヤさんと共有する場の中で直
接聞いた話を取り上げる」「研究者の資料として耐え
うる記録とする」「ミヤさんの語りや語りの場が

伊藤 龍平

伝わる本にする」という方針を立てたが、しかし、具体的な作業に入ると、話の配列をどうするか、語りの場を伝えるための工夫をどうするかなど、さまざまな問題にぶつかったという。同じ話でも四人の翻字した原稿をつき合わせてみると随所に違いがあり、とくに、声や音の聞き取りは統一できないことがあったとの発言など、示唆に富む指摘が多くあった。

川森は、観光施設における昔話の語りを、さまざまな状況を含めて記録していくなかで気づいた「ふるさとイメージ」の重要性について話した。このイメージをめぐる外と内（遠野で暮らす人々）との関係、言い換えれば、理想と現実のズレについて、外に飲み込まれるだけという見方ではなく、地元が意識的にこのイメージを活用していこうとする立場から分析した。また、昔話の語りにかかわっていくことから生れる中高年期の人生の新たな意味づけの問題や、イチゲンサンとでもいうべき観光の場における聞き手と語り手の関係のあり方をどう捉えるかといった問題提起がなされた。

佐藤は、語り部の位置づけについて話した。外部からやってきた研究者たちに語って聞かせることのできる人は「語り手」、昔話を聞きに来た限られた人でなく、語り部ホールなど多くの人の前で、時には聞きたくない人を相手に語る力をもった人は「語り部」と分けているという。遠野の昔話の現在は、語り部の人たちの努力の積み重ねによるところが大きいと説く。また、遠野には、子どもの頃に昔話を聞いた経験がありところどころ覚えているが、まとまった話として語れない人も多い。こういう人たちに語り部になってほしい、そういう思いから平成8年(1996)に始めたのが語り部教室で、大きな狙いの一つは、語りを学ぶ人たちを通してその背後にいる子どもたちに語りかけることだという。

後半の討論の時間が短かったが、質問や意見が活発に交わされて充実したシンポジウムであった。

(埼玉県)

第45回日本口承文芸学会研究例会は、平成15年3月15日(土) 國學院大學渋谷キャンパスにおいて、シンポジウム形式で開催された。テーマは「身体という場所—口承文芸研究の一視覚—」、コーディネーターは兵藤裕己氏であった。

当日配布された要旨によると、本シンポジウムの目的は、現今の世界情勢を「柳田国男が「口承文芸史」を構想した1930年代」に比定したりえて、「声と身体がまさに今日的なテーマ」であるとし、「ポスト柳田の口承文芸研究」を模索する点にあるとのこと。次にパネラーの名前と題目を紹介する。

姜竣「メディア文化と視聴のあり方—紙芝居からテレビへ—」

斎藤英喜「身体的神楽、コトバの神楽」

高木史人「トータルとしての昔話—口承／口承＝文学研究の射程と身体」

野村典彦「たしかめる・ただす—総合的な身体感覚としての伝説」

姜氏は戦後もっとも隆盛したメディアであるテレビジョンを、斎藤氏はみずから太夫として観察した高知県物部村のいざなぎ流の祭文を、高木氏は従来の「語り」という枠組みから解放された昔話を、野村氏は近代のツーリズムと深く関わった伝説を、それぞれ素材として、口承文芸の宿る「身体という場所」について考察を加えた。

斯界をリードする方々が顔を揃えただけのことはあり、各人の発表はいずれも示唆に富み、同じ道を行く者として啓発されるところが多かった。にもかかわらず、シンポジウムを終えての評価が成功とは言い難いのは、司会者とパネラー、パネラー間、そして壇上とフロアとのスタンスの相違が、止揚されることなく、相違のままに終始したからであろう。当日会場にいた一人として、自戒を込めつつ、このテーマを今後の宿題としたい。

(中華民国)

事務局より

□事務局報告（平成15年7月23日現在）

◇第27回大会（遠野）は、6月7日・8日の両日にわたり実施され、約170名の参加者を
得て、盛会のうちに終わりました。

□例会のお知らせ

日本口承文芸学会第46回例会

日時 2003年12月16日（土） 13:30～17:00

会場 市川市生涯学習センター3階研修室

（総武線・都営新宿線本八幡駅徒歩15分）

テーマ 学校教育と口承文芸

発表者 桜井美紀氏（語り手たちの会／立教大学講師）

高木史人氏（名古屋経済大学／口承・文化研究・会）

米屋陽一氏（日出学園中学・高校／日本民話の会）

コーディネーター 根岸英之（市川市中央図書館／市川民話の会）

□受贈書リスト

高橋貞子著『座敷わらしを見た人びと』岩田書院 2003年6月

高橋貞子著『増補新版 河童を見た人びと』岩田書院 2003年6月

石井正己監修、青木俊明・表賢司・菅沼秀行・多比羅拓編『遠野物語辞典』岩田書院
2003年6月

※住所変更などがありましたら、事務局までご連絡下さい。

※口承文藝にご関心のある方をぜひご紹介下さい。

☆日本口承文藝学会への入会を希望される方は、入会申込書をご請求下さい。

入会金 1000円、年会費 4000円です。入会申込書の請求は事務局まで。

「伝え」第33号の発送が大幅に遅れましたこと、深くお詫びいたします。

日本口承文藝学会 事務局

〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1

東京学芸大学 古典文学第4研究室（石井正己助教授研究室）

TEL/FAX 042(329)7246 [水・金曜日、在室]

The Society for Folk-Narrative Research of Japan
c/o Assistant Prof. M. Ishii, Tokyo Gakugei University,
4-1-1, Nukuikitacho, Koganei-si, Tokyo, 〒184-8501, Japan

☆「伝え」編集担当は、米屋陽一・大島建彦・川島秀一・小島美子です